国際理解教育コース，日本語研究
担当教員：佐藤栄作

キャップ制による開講時期の変更―「日本語概説」のゆくえ―

国語教育講座・佐藤栄作

１．授業の概要

一昨年度まで、総合人間形成課程、学校教育教員養成課程とも、１年前期「日本語概説－日本語学入門－」、１年後期「日本語研究－日本語文法入門－」であったが、昨年度からキャップ制の導入により、学校教育教員養成課程の「日本語概説」は２年後期となった。つまり、本年度から、学校教育教員養成課程は、日本語学の入門として位置付けてきた「日本語概説」よりも、「初等国語」を先に学ぶことになった。

授業内容

本年度後期の「日本語概説」の授業内容は以下の通り。途中、サクラメント大学の増山先生とのスカイプによる交流と附属小の研究大会が入ったため、学生の了解を得てシラバスを変更した。

第１回　日本語学とは、言語の特徴
第２～10 回　日本語の音声・音韻
（第９回　サクラメント大との交流）
第 11～15 回　日本語の文字・表記
（第 14 回　附属小学校研究大会への参加）

受講生

学校教育教員養成課程２回生１５名、総合人間形成課程４回生１名。前者は国語専修１４名（評価の対象となったのは１３名）。

２．授業の目的・到達目標

【目的】国語科教員として理解しておくべき日本語の概要を学ぶ。

【到達目標】
（1）母語としての日本語を客観的に見直し、自覚的にとらえられるようになる。
（2）言語の本質と日本語の特徴について、学んだ基本的知識を他者（学習者）に説明できる。
（3）日本語の特徴、あるいは言語の構造について、さらに深く学んでみたいと思うようになる。

【ディプロマ・ポリシー】
教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）

３．授業評価法と結果

担当者の独自アンケート（A）と「ＤＰによる授業評価アンケート」（B）

独自アンケートは、
１　この講義で学んだことを振り返って
１－１　ものの考え方が変わったと感じたこと
１－２　社会に出てから役に立つと思ったこと
１－３　教員になって役に立つと思ったこと
１－４　人に教えてあげたいと思ったこと
（「あり」か「なし」か。「あり」の場合、具体的に回答できる欄を設けた。）
２　日本語学関係の講義はまだある。日本語のどういうことについて学びたいか。
（記述式）
３　「初等国語」より後になってしまった。「初等国語」との連携・調整が必要だと考えている。意見・助言があれば。
（記述式）

Ａ独自アンケートの結果

回答者は１４名（学校教育教員養成課程）。

１－１　ものの考え方が変わったと感じたこと
あり　１１名　　なし　３名
・日本語に対する考え方　３名
・日本語の表記体系について　１名
・日本語の文字の特徴について　１名
・漢字と日本語のつながり　１名
・発音の複雑さ　１名
・「を」の認識・発音　１名

１－２　社会に出てから役に立つと思ったこと
あり　７名　　なし　６名
・日本語の発音
・生徒の関心を引ける

１－３　教員になって役に立つと思ったこと
あり　１２名　　なし　１名
・日本語の発音、アクセント
・漢字のしくみ　２名
・方言
・「を」の発音の地域差　２名
・漢字や国字
・生徒の関心を引ける
・国語教師として知っておくべきこと

１－４　人に教えてあげたいと思ったこと
　　あり　１２名　　なし　１名
・日本語について気づかないこと
・漢字が豊かな表現を支えていること
・画数の多い漢字
・方言
・ハ行音の独自性
・ひらがなとカタカナの違い
・国訓や国字
・自分自身が驚いたこと
・話したいことばかりだった

２　日本語学で今後学びたい領域・テーマなど
・方言
・自分たちが使っている日本語が正しいかどうか

３　連携・調整についての意見・助言
・すでに「初等国語」や共通教育で概説的なことをやっているので、もう少し深く踏み込んでもいい
・「初等国語」との連携・調整をもっと

Ｂ「ＤＰによる授業評価アンケート」の結果

回答者は１３名のうち国際理解の１名を除いた結果

	④	③	②	①
ＤＰ１Ａ	4	7	1	0
ＤＰ１Ｂ	8	4	0	0
ＤＰ２Ａ	0	3	5	4
ＤＰ２Ｂ	0	4	5	3
ＤＰ３Ａ	4	8	0	0
ＤＰ３Ｂ	3	9	0	0
ＤＰ４Ａ	3	8	1	0
ＤＰ４Ｂ	2	9	1	0
ＤＰ５Ａ	1	9	2	0
ＤＰ５Ｂ	1	4	5	2

本講義が関わるＤＰは、ＤＰ１(知識・理解)であるから、おおよそ貢献できているという結果である。ＤＰ３(表現・技能)についても貢献できている。ＤＰ４(関心・意欲)は、シラバスには掲げていないが、ここでも貢献できるはずであり、次年度は、改善策を講じたい。ＤＰ２(思考・判断)、ＤＰ５(態度)は、ほとんど貢献できていない。ＤＰ２は「教育をめぐる現代的課題」、ＤＰ５Ｂは「多世代にわたる対人関係」であるから、やむを得ない結果かもしれない。しかし、思考の基盤である言語は、現代的課題にもつながるはずであり、このポイントが上昇するよう努めたい。

４．まとめ　－反省と次年度の改善－

前期の「日本語概説」は例年通り実施し、６０名程度の中規模の講義だった。日本語学の入門という位置づけは、１年前期という開講時期からも当然である。しかし、２年後期開講となった学校教育教員養成課程の「日本語概説」は、開講時間帯も影響してか、受講生はほぼ国語専修の２回生のみの小規模講義となり、昨年度までの「日本語概説」とまったく違った様子になった。

にも関わらず、途中まで、従来通りの日本語学入門の内容で進めてしまった。受講生の約半数は、１回生時、共通教育で日本語関係の授業を受講済みであり、また全員が私自身の「初等国語」を受講していた。後半は、これまでとやや方法を変え、課題について、個人、小グループで考える時間を増やした。

独自アンケートの結果から、取り上げた内容は国語教員、小学校教員を目指す学生にとって意味のあるものであり、興味を持って受講してくれたことは確認できたが、ちぐはぐな感じを受講生も気づいていたようであった。「ＤＰによる授業評価アンケート」の結果は左のとおりであり、これを改善のために活かしたい。

次年度の「日本語概説」は本年度までをかなり異なった進め方をしようと考えている。

総合人間形成課程対象、１年前期の「日本語概説」の方は、おおよそ従来のやり方を踏襲しつつ、理解・定着の確認を加えていくつもりである。

一方、学校教育教員養成課程２年後期の「日本語概説」は、科目名の変更はできないが、「概説」すなわち入門ではなく、国語科を強く意識し、国語教科書の「伝統的な文化と国語の特質に関わる事項」と定番教材の文章を取り上げ、それらから「音声・音韻」「文字・表記」「文法」「語彙・意味」「方言」について解説していくものとしたい。

逆に「初等国語」は、これまで５回を「発音」「文字・表記」「文法」「語彙・意味」「方言」の１回ずつに当てたが、これをやめ、「仮名遣い」「常用漢字・教育漢字」を中心としたものに変更する予定である。よって、現在の１回生からは、１年後期に必修の「日本語リテラシー入門」も始まっており、およそ次のような流れとなる。

１年前期　（共通教育の日本語関係科目）
１年後期　日本語リテラシー入門
２年前期　初等国語　「仮名遣い」など
２年後期　日本語概説　国語教科書利用
３年前期　日本語研究
３年後期　日本語学特講
４年前期　日本語学演習